



昨年十二月にカリフォルニア州で起こった論争は、さまざまアメリカ全土を巻き込み、いまだにおさまる気配を見せていない。この論争とは、黒人の話す英語と学校教育の在り方を問題提起するもので、人種を問わず、賛否両論が成立している。

論争の発端は、カリフォルニア州オークランド市教育委員会が、市立学校に通う黒人生徒のための特別助成金を連邦政府に申請したことだった。黒人生徒は明らかに白人の生徒よりも英語の成績が悪く、基本的な読み書き能力を身につけていない者が多いというのがその理由だ。この助成金とは、東南アジアや中南米からの移民を多く抱える学区で、「外国語としての英語教育」というカリキュラムを実施するために与えられる。

黒人英語と米の言語政策

ダニエル・ロング



大阪樟蔭女子大学日本語研究センター助教(社会言語学)

Daniel Long

1963年、米国テネシー州生まれ。テネシー州立大学卒。82年に来学蔭を経て国際基督教大学大阪樟蔭女子大学専任講師。共著『社会言語学図集』、『新・方言学を学ぶ人のために』など。

けなくなった、と述べた。

複雑な文法と単純な発音

実は、「ブローケン・イングリッシュ」と非難されてきた黒人英語は、文法面で標準英語よりさらに複雑だ。例えば、進行中の動作を示す「現在進行形」と、習慣として繰り返される「反復動詞」との区別は標準英語にはないが、黒人英語には存在する。すなわち、ある側面では黒人英語は、標準英語では言い表せない細かい意味を表現できるのだ。

他方、発音の面では黒人英語は標準英語より単純化された体系を持っている。つまり、標準英語では発音の違いで区別される二つの単語が、黒人英語では同音異義語になる。

例えば「ファイン(素晴らしい)」と「ファインド(見つける)」は、黒人英語では両方とも「ファイン」と発音される。「マイン(私の心)」と「マインド(心)」も同様に同音異義語だ。こうした標準英語との発音の違いが、黒人の生徒の読み書き能力の低きの最大の原因であると言語学者は考えている。

標準英語とさえ、つづりは非論理

標準英語とのギャップ難題

背景に多様化恐れるワスプ

的で分かり難いとよく言われる。要するに、文字と発音が必ずしも一致しないのだ。昔の日本語で「蝶々(ちようちよう)」を「てふてふ」と書いたが、英語にはこうした例外的なつづりが数え切れないほどある。学校の先生はいろいろと工夫して、この難点を乗り越えようとする。例えば、先に挙げた「ファイン(fine)」の最後には発音されない「e」の文字がある。教室ではこれを「黙字」と説明し、生徒に理解させる。しかし、黒人の生徒は「ファインド(find)」もこれと同じ発音なのに、なぜ「d」がついているのか戸惑ってしまう。

先生が「黒人英語」の発音体系に関する知識をわずかも身につけていれば、黒人生徒の話す「母語」に配慮した説明をして、この問題はすぐ解決されるだろう。しかし、現状はそうではない。それどころか、生徒が「あなたの英語は間違っているから、ちゃんとしゃべりなさい」と叱(しか)られることすらある。「白人生徒にはわかるのに、なぜ私だけ理解できないのだろう」と黒人生徒が落ち込み、彼らがやがてやる気をなくすのも無理のない話といえる。

無意味な「方言か言語か」

ところが今回の論争では、マスコミはこうした深刻な実情を無視して、「エポニックスは方言なのか、言語なのか」という無意味な議論だけを展開している。かつて、沖繩のことを「琉球方言」と呼ぶべきか、「琉球語」と呼ぶべきかという議論があった。名称は何であれ、沖繩のことは本土のことばが歴史的に姉妹語の関係にあるという事実には変わりはない。私は十年前に、大阪で暮らす沖繩出身者とその子孫を対象に面接調査を試み、ことばの名称よりもさらに深刻な問題があることに気づいた。それは、方言を理由に仕事や住居を断られたり、なまりを笑われて仲間外れにされたりするなど、いわゆる「方言差別」の事実があったことだ。

「エポニックス」論争の背景には、こうした方言差別の問題もあることが推察される。黒人であることを理由に就職などの面で差別を行えば、雇用者は人権侵害で訴えられる。しかし、標準英語が話せないという理由ならば人権侵害とはいえず、黒人は泣き寝入りするしかない。このような現状をふまえ、教育現場では、母方言に対して自信を持たせつつ、フォーマルな実社会ではやはり標準英語が要求されるのだと、一見矛盾する事実を教えるべきではない。このギャップをいかに教育や政策がらめていくのかという難題に今、アメリカ政府は直面している。

同化による社会維持に変化

なぜ、アメリカで黒人英語という方言を考慮した教育の問題がこれほど猛烈な議論に発展したのだろうか。その一因は、主流を占めるWASP(ワスプ)と呼ばれるイギリス系アメリカ人が、国民の極端な多様化を恐れていることにある。アメリカは「人種のあるつば」と言われてきた。この言葉は、アメリカは様々な文化を持つ移民が集まってできた国であることを指しているが、現実ではそれぞれの移民が祖国の文化や言語を伝承するのではなく、それを捨ててワスプ社会に同化してきたのだ。

これまでのアメリカ社会では、イギリス系の人々が多数を占めていない地域でも、黒人やヒスパニックのようなマイノリティーが白人に歩み寄って、社会体制の現状維持ができた。しかし近年、「エポニックス」教育に象徴されるアメリカの多様化に対して、ワスプの多くは恐怖を隠しきれない。こうした言語政策の問題は、二十一世紀を迎えようとするアメリカが抱える最大の社会問題のひとつだ。